

「その時、少年は神になる。」狩衣装束で弓受けの儀により神の使いの手となった中学二年生の



「射手」は、神馬に乗り、数千人の観客が見守る馬場を走り抜け、矢を放ちます。

肝付町に約九〇〇年続く「高山流鏑馬」は、保存会や多くの地域の方々に支えられている伝統行事です。「射手」と、前年に射手を務めた「後（あと）」射手の二人が主役となり、神馬とともに約五〇日間の練習に励みます。

高山中学校では、これに全校体制でボランテイアとして協力しています。放課後、四十九所神社前へ移動し、直線三三〇メートルの馬場沿いに綱を持つて並んで立ち、目の前を馬が走り抜ける風を感じながら、射手と馬が一体となった練

習を見守ります。その間、多くの地域の方々とあいさつを交わし、会話もします。流鏑馬練習の手伝いではありますが、地域との交流活動の色合いを強く感じます。コミュニケーション力が高まる機会でもあり、伝統行事へ携われている自己有用感や安全な練習を支えている責任感等も育まれているように感じます。

奉納を終えると、射手の大役を務めた生徒はもちろん、多くの生徒が達成感あふれる表情を見せ、成長を感じさせます。感動の瞬間です。これからも流鏑馬とともに地域に支えられ、大きく成長していく生徒たちの活動が継続できるように応援していきたいと思います。

(校長 瀬戸口 浩司)



流鏑馬練習で綱持ちをする生徒の様子